

相場技法抜粋

—— 相場技術論の核心 ——

林輝太郎 著

相場は、経済情勢や材料を集めて推理する「当てもの」ではない。

これが私が長い相場経験から学んだことを端的に表現する言葉であり、相場技術論の基本であり出発点でもあるのだが、誤った考えでスタートした人にはなかなか理解されない。実践のための売買法や具体的な相場テクニクを学ぶ前に、相場という行為のあり方と自分自身のあり方を確認することが必要だ。どんな分野でも常識として考えることだと思うが、こと相場に関しては不思議なことになりがしろにされる。この大切な作業の土台となる考え方を知ってもらうために、今までに書いた相場技法に関する大切な事項から主要なものを抜粋したのが、この本である。

このような思いから、林投資研究所が人形町にあったところに『林レポート相場技法抜粋』として仕上げたのが本書のオリジナル版で、オフィスが池袋に移転したあとも簡単に中とし印刷したものを作り、多くの投資家に勧めてきた。

今回のリメイクでは、以前からの27項目に5項目を加えて合計32項目とし、持ち運ぶのに便利な新書サイズに仕上げた。シンプルでありながら、とても大切な事柄だけに絞ってまとめてあるので、ぜひ持ち歩くなどして、思い出したときに1項目ずつでいいから読んでもらいたい。

【このコンテンツは著作権法で保護されています】

学校のテストのように、特種な条件下に限定されたものの以外は、万人に共通する正解など存在しない。「いま売るか買いか」と問われても、正解を示すことなど不可能だ。だから、市場で売り方と買い方によって値段がつけられているのだ。

この本の内容は、多くの投資家が安易に求める正解を示すものではない。自分なりの正解を導き出すための方法とともに、実は「自分なりの正解を導き出すための方法をつくり上げる方法」を示しているのだということを、決して忘れないでほしい。

私は、自分自身のこだわりを具体化した林投資研究所の存在を誇りに思っている。自立した投資家を地道に増やし、その人たちの助けとなる情報を提供していることが、私自身の正解だったと確信している。

これからも、迷いや疑問を抱えている投資家の道しるべでありたいと思う。

最後に、この本を仕上げるにあたって協力してくれた林投資研究所のスタッフと関係者のみなさんに感謝の意を表したい。そして何よりも、林輝太郎が語る相場道の理解者として支えてくれている読者のみなさんに、心から感謝したい。

みなさん。正しい筋道を進んで、ぜひ成功者となってほしい。

相場技法抜粋 目次

まえがき(林輝太郎)	2
抜粋1 勉強のノートを作ろう	6
抜粋2 ゴールこそが大切	8
抜粋3 学者・評論家になるな	10
抜粋4 スクーター・ダンプカーの原則	12
抜粋5 複雑に考えるな	14
抜粋6 無知のための損	16
抜粋7 方法・流派・得意技	18
抜粋8 「自分なりの方法」をつくる方法	20
抜粋9 技術が先	22
抜粋10 アマチュア仕様とプロ仕様	24
抜粋11 相場技術論が優位	26
抜粋12 分割売買は技法のはじまり	28
抜粋13 「当たり前」の三原則	30
抜粋14 グラフは大切だ	32
抜粋15 技術は習得するもの	34

【このコンテンツは著作権法で保護されています】

抜粋16 上達を早める方法	36
抜粋17 売買の種類 片張り・ツナギ・サヤ取り	38
抜粋18 やり方を変えるな	40
抜粋19 欠点を容認すること	42
抜粋20 売りを含めてこそ	44
抜粋21 区切りの大切さ	46
抜粋22 上達を拒否する人たち	48
抜粋23 演出は常にオーバーだ	50
抜粋24 少しは辛抱が必要	52
抜粋25 プラス志向で長所を伸ばせ	54
抜粋26 品ぞろえ、営業方針、そして在庫管理	56
抜粋27 少しは考えよ	58
抜粋28 見えてくる	60
抜粋29 精神論より考え方	62
抜粋30 危機管理	64
抜粋31 場帳とグラフ	66
抜粋32 専門は強い	68
あとがき(林知之)	70

1 勉強のノートを作ろう

誰でも学校ではノートを作り、大いに利用した。

学校の講義はもともと系統立っているものののに、さらに系統立てて記憶したり、基本をしつかりさせたうえで応用できるようにするために、ノートをとったのである。

実社会に出ると、意外にノートをとらない。しかし、相場の勉強のためにはノートをとることをすすめる。

相場の上達には非常に個人的な研鑽けんさんが必要であるうえに、新聞、雑誌、単行本などから得られる情報が相当に断片的であるから、まとめるためにはノートが果たす役割は大きい。

売買の教科書としてまとめられているものに限定したとしても、考え方や方法、そして水準にバラツキがありすぎる。つまり、ミ―ハー投資家向けのものや理論だけが上すべりしたものが多いのだ。また、やや水準の高いものでも、昔の剣術における柳生流、一刀流というような違いで分けようとする、かなりの種類のものが雑然と存在している。

だから、勉強のノートが絶対に必要なのだ。

不明な語句や解説

ひとつの考え方や方法論についての批判

「このコンテンツは著作権法で保護されています」

自分の進むべき道筋

などなど、何でもよい。他人に見せるものではないのだから、どんな恥ずかしいことを書いてもよい。

意識を高めるためには、安いノートよりも上等な、たとえば皮の表紙のバインダーにルーズリーフの用紙をとじるのがいい。用紙も良質なものを使い、項目別あるいはジャンル別に分けながら、片面のみを使用する。両面に書くと、裏と表で分類が違ってしまうことがあるからだ。ちなみに、鉛筆書きは不可である。

不明な語句などを記したページは、わかった時点で捨ててもいい。だが、自分が進むべき方向、学ぶべき技法、自分の得意技の確立といった大切な項目は、たとえば日曜日に整理しながら復習していく。

ノートの必要性は上達した人すべてが言うことであり、提言して感謝されることのひとつである。

ぜひノートを作って、有効活用してほしい。

2 ゴールこそが大切

マラソンではゴールが見えたときに終わりではなく、ゴールに入ったときに終わりである。当たり前のことだ。同様に売買においては、買い値より上がっただけで喜ぶのは尚早で、手仕舞い（売り）したときがゴールだ。

世の中なんでも問われるのは結果であり、スタートの仕方や状況は大きな問題とはされない。まして売買は「結果良ければすべて良し」であり、まぐれでもなんでもゴールのみで評価される。

株を買って上がった、つまり建て玉に利が乗ったならば悲しむべきことではないが、喜ぶのはまだ早い。何が起るかわからないのが相場だ。ゴールに入ったときに成果が決まるのだ。ところが、街の本屋にあふれる株の本や投資雑誌、あるいは評論家の講演でも、ほとんどが「株の買い方」、つまりスタートのことについてのみ語られている。一般投資家も「買うこと」の勉強ばかりしていて、「売り方」つまり「成果の上げ方」を取り上げることが、全くといっていいほどないのである。

これは、説明不足どころのさわざではない。売買を行ううえでは、全く用をなさない。株式投資は株を持つことと説明できるが、持つことは単なる手段であり、断じて目的ではない。

【このコンテンツは著作権法で保護されています】

株は「売るため」「買って売って利益を上げるため」に買うのである。

不思議なことに、現物を保有することのない商品先物取引でも、このミイハー志向がみられる。売買の対象物や市場の構造にかかわらず、一般投資家はどうしても「買い偏重」になるのである。

売買での成功を志したからには「売り」について勉強し「売り」のテクニックを身につけなければ、少しの成果も上げることができない。この点で、一般投資家の猛省を促したい。

証券会社でも商品会社でも、広告にお金をかけて不特定多数の投資家を集めるいわゆる大衆店では、社長からセールスマンに至るまで営業戦略上の理由から、「売り」を口にすることはタブーとされている。だから、一般投資家の窓口となる従業員はそもそも売りの大切さを知らないし、たとえ知っていたとしても顧客に対して「売り」という言葉は絶対に言わない。

売買が上達する、少なくとも何らかの成果を上げようとするからには、「専門店」（地場の店）を選べといわれる理由のひとつがここにある。